

晚清小說史

——
阿英

飯塚 朗 訳
中野美代子

東洋文庫
349

平凡社

晚清小説史

阿英

飯塚朗
中野美代子 訳

いづか あきら

飯塚 朗

1907年、横浜市生。東京大学文学部卒。

専攻：中国文学。

主訳書：『剪燈新話・余話』『斷鴻零雁記——蘇曼殊・人と作品』（共に平凡社、東洋文庫）『老殘遊記二集』（平凡社、中国古典文学大系）、巴金『家』（岩波書店）等。

なかのみよこ

中野美代子

1933年、札幌市生。北海道大学文学部卒。

現職：北海道大学助教授。

専攻：中国文学。

主著：『カニバリズム論』（潮出版社）、『中国人の思考様式——小説の世界から』（講談社）、『悪魔のいない文学——中国の小説と絵画』（朝日新聞社）等。

晚清小説史

東洋文庫 349

1979年2月23日 初版第1刷発行

定価 1,400円

訳者 飯塚 朗
中野美代子

東京都千代田区四番町4番地
発行者 下中邦彦

印刷 東洋印刷株式会社
製本 株式会社 石津製本所

発行所 郵便番号 102 東京都千代田区四番町4番地
振替・東京8-29639 株式会社 平凡社

© 株式会社 平凡社 1979 不良本は、直接小社サービス課で
Printed in Japan お取替え致します(送料小社負担)

はしがき

今から三十年近く以前のことになるが、私は急遽札幌に赴任して中国文学史を講ずることになったものの、別にそれまでさほど蘊蓄があったわけでもなく、それにまた近・現代の範圍を扱いたいなどと企てたものだから、当時まだまとまった参考資料があまりにも乏しかったのに辟易したものである。もちろん現代に関してはすでに一九三〇年代に『中国新文学運動史』（王哲甫、一九三三）、『新文学運動史資料』（張若英編、一九三四）などが参考になったし、『中国小説史』（郭箴一、一九三六）の第八章「民国」の部が案外詳しくて、講義ノートの作製に役立ってくれたから、いくらか嚙じってきた分野でもあったこととて、まがりなりにも一応恰好はついたようであった。もっとも中国においても、本格的に現代のいわゆる「新文学史」というものがまとまって出たのは五〇年代であって、王瑤の『中国新文学史稿』（一九五二）、葉丁易の『中国現代文学史略』（一九五五）、劉綬松の『中国新文学史初稿』（一九五六）などその主なものと考ええるが、これらも文化大革命を経た今日まだまだ決定版とはいえないし、その後一九六二年に北京から出た『中国文学史』三冊本（中国科学院文学研究所編、人民文学出版社版）も清末までで終わっており、一九七六年に上海から出た改訂版『中国文学發展史』（劉大杰、人民文学出版社版）もまた二冊目の清末までである。現代文学史はかえって中国ではなかなか書きにくかろうと推測されるが、ともあれ中国でその時

時に出たものに照らして私のノートも改訂してきたつもりである。しかし近代の範囲については、とくに当時は参考文献の貧困を託った。古典からの文学通史はもちろんたくさん出ていたのだが、大抵は清朝文学最盛期の『紅樓夢』や『儒林外史』あたりの詳述に終わり、清朝末期の部分はきわめて簡単な記述しかなかった。日本ではもちろんだったが、中国でもこの範圍の文学の歴史は「昼間の月みたい忘れられてゐる」と当時私のノートにも書いたことがある。「中国の近代はアヘン戦争からはじまる」ということを肯定して話し出せば、文学の分野で、「五四」運動まで八十年近いブランクができてしまう。私は戊戌の政変期を境にして、いわゆる清朝末期の文学も前後期に分けてみたが、そうすると、以前が六十年近くあり、以後のいわゆる晩清時期も二十年強ということになるが、その二十年強の間の文学事情さえよくつかめず、現代へコンクリートすることはできなかった。当時私が骨子としたのは、陳子展の『中国近代文学之變遷』（中華書局、一九三五）であつて、それに魯迅の『中国小説史略』（新潮社、一九二三～二四。改訂版は一九三一）末尾の「譴責小説」を裏打ちして、語り継いだというお粗末な次第であつたようである。この阿英の『晩清小説史』はすでに一九三七年に商務印書館から出ていたようであるが、それははやく絶版となり、私が手にして見ることができたのは、一九五五年の改訂版（作家出版社版）が出てからであつたと思う。それまで清朝末期の小説といえは、『官場現形記』『二十年目睹之怪現狀』『老殘遊記』『孽海花』が代表作としか知らなかったのを、阿英のお蔭で夥しい数の晩清小説にともかくお目見えできたわけである。

私がさつそくこの『晩清小説史』をノートに翻訳して、清末後期の文学史を語る資料にさせてもらった

のはもちろんである。かなり厚手のノートに三冊分あった。しかしこの訳に当たって閉口したのは、引用文がふんだんにあることだった。晚清小説のある一段を抜き書きして論じているので、その前後の筋もよくわからぬ。またいわば古い口語だし、迷信、行事その他が縷々と述べられていると、難解で手に負えない部分が随所にあった。阿英の『晚清文学叢鈔』が大部に出版されたのは六〇年代になってからだし、原書で今もって手に入らぬものも多いのだから、当時はなおさら疑問箇所が多く、そこは原文のまま残しておいたから、訳といっても穴だらけといつてよかった。しかしこれのお蔭で、私の講義もいくらか厚みがでたかもしれないと思っている。

「五四」以後の新文学はけっして唐突に起こったものではなからう。「断絶」があるかのように思われたとしたら、清末の部分が「昼間の月」のように忘れられていたからではないか。私は以前に少々蘇曼殊のことを調べたことがあったが、彼は清末民初にかけての文学者というべく、少なくとも章太炎を軸として、周作人、魯迅に直接のつながりをもっていたと思う。そこへ来るまでの『晚清小説史』が出てくれたのだから、何とか日本でもこの「断絶」を埋めなければなるまいと思ったが、一朝一夕にいくものではなく、それら小説の原本を読むだけでも大変な仕事であろう。さいわい札幌で、それに応えて清末小説に関心をもってくれたのが、中野美代子さんだった。彼女は何篇か清末文学に関する論文を書いた。その後どこかの大学では『晚清小説史』をテキストに用いているという話を私も仄聞したし、若い清末文学研究者も徐々に殖える傾向にあると思われる。それなのに『晚清小説史』は改訂版からも二十年近く、初版からなら四十年にもなるのに、どこからも翻訳が出版されずにきてしまった。前述のように引用部分ごとに難解

なのと、原資料に当たったのの詳細な注解が必要なので、なかなか手を着けられなかったわけであろう。

私はその後勤めを関西に移したが、ちょうどそこで増田涉さんといっしょだったから、共訳をお願いして私のノートの「穴」をできるだけ埋めて出版したいと話してみたことがあった。増田さんはかつて清末小説『苦社会』（中国現代文学選集所収、一九五三）も訳されていたし、清末の文献も多く所持しておられたからである。しかしいろいろとお忙しかったこともあって実現しないまま、去年ご他界の憂き目を見ることになってしまった。

しかしさいわいにも今回中野美代子さんと共訳というかたちで、それに関大中文の博士課程を出た中島利郎君にもいろいろ協力してもらって、一番恰好と思っていた平凡社の東洋文庫に入れて出版していただくことができ、大変欣快に思う次第である。さぞ増田涉さんも喜んでくれるであろう。やはり不詳の部分はかなり残ることは中野さんの解説にもある通りだが、一先ずここで上梓しておき、今後の大方の改訂に委ねるべしと心得た次第で、これがいくらかでも晩清小説の紹介ならびに研究にも役立っていただければ幸いだと思う。

凡 例

- 一 この翻訳は、阿英『晚清小説史』（一九五五年、作家出版社刊）を底本とした。初版本（一九三七年、商務印書館刊）との校合は行なわなかった。
- 二 読者の便宜のために、原本にはない小見出しを付けた。
- 三 阿英の叙述における誤りは、原則として訂正してから訳出し、注においてそのことを明記した。
- 四 引用文における……は、阿英による省略個所である
- 五 引用文における「」は、並み活字の場合は訳者による補足個所であり、小活字の場合は訳者による注である。
- 六 地の文における（ ）は阿英による原注であり、「」は訳者による注である。
- 七 阿英による地の文は飯塚が、引用文は中野がそれぞれ訳し、全体の統一及び注は中野が担当した。

目次

はしがき		飯塚朗		i
凡例				v
第一章 晩清小説の隆盛				三
第二章 晩清社会概観(上)				三
第三章 晩清社会概観(下)				三
第四章 義和団事件の反映				三
第五章 反華工禁約運動				三
第六章 商工業戦争と反買弁階級				四
第七章 立憲運動の二面観				二〇
第八章 民族革命運動				二三

第九章	婦女解放問題	一五
第十章	迷信反對運動	一七
第十一章	官僚生活の暴露	一九
第十二章	講史と公案	三〇
第十三章	晩清小説の末流	三六
第十四章	翻訳小説	三七
訳 注		二七
解 説	中野美代子	三七
阿英編著目録(稿)		四〇
あとがき	中野美代子	四三
『晩清小説史』書名・人名索引(卷末)		

晩清小説史
——
阿英著

飯塚朗
中野美代子
訳

第一章 晚清小説の隆盛

晩清小説の統計 晩清小説は中国小説史上もつとも隆盛をきわめたが、制作された小説が結局どのくらいあったか、従来正確な統計はなかった。図書目録でいちばん多く収録しているのは『涵芬樓新書分類目録』であろうが、文学部門は全部で翻訳小説を四百篇ちかく、創作は百二十篇ほど収めてあり、出版時期のもつとも遅いのは宣統三年（一九一〇）である。雑誌『小説林』所載の、東海覺我の「丁未年（一九〇七）小説界発行書目調査表」では、その一年間の著訳書の統計が百二十余篇ある。『東西学書録』（一八九九）はわずか三篇、『訳書経眼録』（一九二七）はやや多いが、三十篇にすぎない。梁啓超の『西学書目』（一八九六）は小説を収録せず、『新学書目提要』（通雅書局、一九〇四）は文集を収めただけである。孫楷第の『中国通俗小説書目』（北平図書館、一九三二）に収められた創作もまた『訳書経眼録』の数と同じである。実際には当時発行された小説は、著者の知るかぎりでは少なくとも千篇以上で、涵芬樓所蔵のおよそ三倍になる。

隆盛の原因 この空前の隆盛をもたらしたのは、実際にどんな原因があったか。第一に、印刷事業の発達によって以前のような出版の困難がなくなったことは勿論だが、新聞事業の発展から実用上多量生産

を必要としたこと、第二に、当時の知識階級が西洋文化の影響をうけて、社会的な意味で小説の重要性を認識したこと、第三にはつまり、清朝がしばしば外敵に屈し、政治がまたすっかり腐敗して、みんながもうついてはいけなさと知ったので、ついに小説を書いて攻撃し、維新と革命を提唱したこと、である。

小説専門の雑誌 それゆえ当時は新聞が競って小説を載せたばかりでなく、小説専門の雑誌も機運に乗じて生まれた。もっとも早いのは、梁啓超が創刊した『新小説』である。光緒二十八年（一九〇二）に発行され、全部で二巻まで出た。掲載された小説には、梁啓超自作の『新中国未来記』、吳趸人の『痛史』、『二十年目睹之怪現狀』、『九命奇冤』、『電術奇談』などがある。ついで李伯元主編の『繡像小説』（一九〇三）半月刊があつて、七十二期まで刊行された。李伯元の『文明小史』、『活地獄』、劉雲の『老殘遊記』はみなこれに発表されたのである。李伯元の没後、吳趸人は『月月小説』（一九〇六）を創め、二十四期まで発行し、自ら『兩晉演義』、『劫余灰』等を載せた。『小説林』はいちばん遅く出て（一九〇六）十二期を刊行、曾孟樸の『孽海花』が載った。これが主要ないくつかの雑誌である。このほか『新新小説』、『小説月報』、『小説時報』、『小説世界』、『小説図画報』（未詳）、『新世界小説社報』の各種があるが、発刊されたり廃刊になったり、あるいは同時に刊行されたり、隆盛の様相を見るのに十分であつた。

梁啓超の小説理論 小説の重要性に進歩的な見解をもったのは、天津の『国聞報』が最初である。この新聞は光緒二十三年（一八九七）に創刊され、嚴復と夏穗卿が一万余言におよぶ長文の「本館附印說部緣起」を合作したが、これが小説の価値を明確にした最初の文章であつた。のちに『国聞報彙編』（一九〇三）が刊行されたがこの文章は収録されず、ついに伝わらなかつた。やがて梁啓超の「訳印政治小説序」（一八九八）「論小説与群治之關係」（一九〇二）が出た。後者は『新小説』の創刊号に載り、影響はもっとも大

きかった。この文章は社会的意義の上から小説の重要性を説明しており、その冒頭でこういつている。

一国の民を新たにしようとするなら、「先ず」一国の小説を新たにしなければならぬ。ゆえに、道德を新たにしようとするなら、必ず小説を新たにすべきであり、宗教を新たにしようとするなら、必ず小説を新たにすべきであり、政治を新たにしようとするなら、必ず小説を新たにすべきであり、風俗を新たにしようとするなら、必ず小説を新たにすべきであり、学芸を新たにしようとするなら、必ず小説を新たにすべきである。さらには、人心を新たにし人格を新たにしようとするならば、必ず小説を新たにすべきなのである。

彼が理由にしているのは、小説には「不可思議な力があり」人の心を支配するのに十分で、社会を改革できるといふのである。「偉大な聖人や哲人が数万言を費やして教誨きょうかいしても足りないもの」を、小説は「一、二冊でこれを破壊してなお余りがある」という。逆に一、二冊の立派な小説は、社会や人心に与える影響が、何百何千という「偉大な聖人や哲人」の書物よりはるかに優っているといふのである。「小説は文学のなかで最上のもの」と認めて、「群治を改良しようとするなら、必ず小説界革命から始め、民を新たにしようとするなら、必ず小説を新たにすることから始める」とした。それ以後これを論ずる者が当然多くなつたが、主なもののは次のごとくである。

さまざまな小説理論 「論文学上小説之位置」(註) (楚卿そきやう『新小説』)

「論写情小説与新社会之關係」(註) (松岑しょうしん『新小説』)

「小説原理」(夏穂卿『繪像小説』)

「論小説与改良社会之關係」(天僊生『月月小説』)

「中国歴代小説史論」(天僊生『月月小説』)

「余之小説観」(覺我『小説林』)

しかしその内容は「論小説与群治之關係」の論旨を超えてはいない。やや新味を帯びているのは天僊生の解釈だけである。彼は中国の小説制作の動機は三種にほかならずとして、政治の圧迫を憤り、社会の混濁を痛み、婚姻の不自由を哀しんで書かざるを得ないのだと指摘している。これらの小説は「みな賢人君子が窮して下に居り、言うことのできない場合は敢えて言おうとはしないが、言わないではいられないときは、遠まわしにこれを言う」。同時に彼は創作と翻訳についても「よく社会の実状に適する事実を選び、国民の嗜好に適した体裁を選ぶ」という基準のもとで制作してこそいっそう大きな効果が得られると、具体的主張を提出している。また陸君亮の「月月小説発刊詞」では、四千言を費やして中国小説の史的発展を叙述しているが、その観点はやはり「論小説与群治之關係」から出発している。

当時『小説叢話』があり、これも『新小説』から始まった。当時の理論で旧小説を批評し、時に斬新な解釈を下したものである。掲載をはじめるとき梁啓超が序文を書いて「中国で前古未曾有の作」と称している。例えば『桃花扇』を民族主義の作品となし、社会生活を考察する態度で『金瓶梅』『紅樓夢』を研究するなど、進歩的な傾向を代表するものといえる。なかで最も注目すべきは、『水滸伝』は民主、民権を提唱する作品、『聊齋』は排満の書などといったことである。いちばん史料価値があるのは黄摩西の「小説小話」(『小説林』)で、その中の旧小説に関する著作目録にはたやすく見られない書物が多いが、魯迅が

全部『小説旧聞鈔』に収録している。

魯迅の譴責小説論 このため晚清の小説にはいくつかの特徴が生じた。第一に、当時の政治社会の状況を十分に反映し、広汎に各方面から社会のあらゆる角度を描き出していること、第二に、当時の作家は意識的に小説を武器として、政府や一切の社会の悪現象に向かつてたえず攻撃を加えていること、である。これがつまり魯迅の『中国小説史略』でいうところの「譴責」〔過失を責め咎めるの意。多く為政者や役人の過失についていう〕である。『史略』はこういつている。

光緒庚子（一九〇〇）の後、譴責小説が特に盛んに出た。嘉慶（一七九六—一八二〇）以来、しばしば内乱（白蓮教、太平天国、捻匪、回教）を平定はしたものの、一方ではまた、しばしば外敵（英、仏、日）に負かされていた。庶民は愚昧で、それでもなお茶をすすりつつ反逆者退治の武勇断を聴いて喜んでゐる始末、しかし有識者は、そのころすでに翻然と改革への思想を抱き、敵愾心に契りつつ維新と愛国を呼びかけ、わけても富強については思いを致したのであった。戊戌政変も失敗し、二年を閑した庚子の歳には義和団の変が起こった。民衆はそこではじめて政府とともに治を図るに足らずと知って、にわかにこれを攻撃する気になったのである。それが小説においては、隠れていたものを発露し、その弊害を明らかにし、時政に対しては厳しく糾弾を加え、攻撃の矛先をひろげて風俗にまで及ぶようになった。

晚清の政治背景 考えてみると清朝はアヘン戦争（一八四〇）以後、政治は日に日に腐敗墮落し、官吏は